

2024 年度 第 6 期 311 セミナールグループ外活動

## 「災害情報伝言ゲーム」による防災啓発活動



### メンバー

佐々木侑里(M2 年)、関町咲穂(2 年)、増井美羽(2 年)、  
千葉雄翔(1 年)、根本蒼唯(1 年)、福岡加彩(1 年)

## 目次

### 1. はじめに p.3

### 2. 石巻市立開北小学校 防災教育チャレンジデーでの取組 p.3

#### ① 開北小学校について p.3

#### ② 開北小学校での災害情報伝言ゲーム p.4

#### ③ 成果と課題 p.4

#### 参考資料 p.6

### 3. 南あわじユース防災プロジェクトでの取組 p.9

#### ① ユース防災プロジェクトについて p.9

#### ② プロジェクトチームでの顔合わせ p.9

#### ③ 倭文小学校での災害情報伝達ゲーム p.10

#### ④ 成果と課題 p.11

#### 参考資料 p.13

### 4. 総括 p.15

### 5. メンバーの振り返り p.16

## 1. はじめに

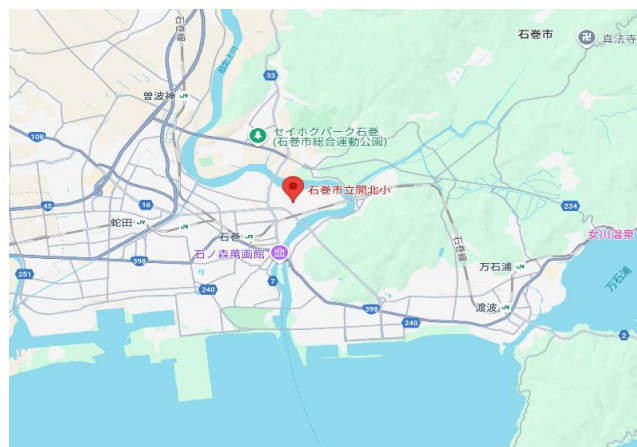
年度初めに、311 セミナールに対して兵庫県南あわじ市「ユース防災プロジェクト」(昨年度 11 月に実施したものに続く継続、2024 年 11 月実施)と、石巻市立開北小学校「防災教育チャレンジデー」(新規、2024 年 7 月実施)の 2 件の参加要請があった。ともに児童や保護者を対象にした学校現場におけるワークショップを行うという内容であったため、311 セミナール・武田先生が両日参加可能なゼミ生有志 6 名を選抜し、「災害情報伝言ゲーム」へ取り組むことを決めた。

「災害情報伝言ゲーム」を実施するにあたって、災害対応において「情報」の重要性を児童たちに伝えることを大きな目的とした。特に、近年 SNS に触れる機会が増えた小学生に対して、情報発信源を確認することや、特定の情報に偏らない多角的な見方をするということといった、情報を取捨選択する力を身に付けてほしいという願いがある。また、このゲームは津波を想定した防災対策について学べるようにも工夫した。このゲームは、東日本大震災を経験した宮城からの視点を踏まえ、阪神淡路大震災が発生した兵庫という異なる地域へも必要な「防災」を伝えられるよう試行錯誤しながらゲームを作成した。

## 2. 石巻市立開北小学校「防災教育チャレンジデー」での取り組み

### ①開北小学校について

石巻市立開北小学校で児童、保護者参加型の防災を考えるイベント「防災教育チャレンジデー」が行われた。開北小学校の佐藤教頭の前任校である東松島市矢本西小学校で、311 ゼミの避難所運営班が第四期 2022 年度のゼミ活動としてマンホールトイレの設置活用活動で取り組んだ経緯があり、その縁で佐藤教頭の転任先である開北小学校で「防災教育チャレンジデー」を企画する際に、ゼミ担当の武田先生に参加を打診され、南あわじプロジェクトと連動した学校現場での防災啓発の取り組みをすることになった。そこで親子参加型の防災教育企画を教室等で分散して行う時間「防災ブースタイム」で宮城教育大学もワークショップを担当した。宮城教育大学のほかに、市や市社会福祉協議会、日本赤十字社県支部、石巻専修大学、3・11 メモリアルネットワークなど 13 団体が参加し、教室や体育館など全 14 ブースに展示やクイズ、体験型のブースなど様々なジャンルのブースを展開した。開北小学校は比較的内陸だが川の近くに位置しており、震災当時は津波の浸水被害も受けている。



石巻市立開北小学校周辺の地図

## ②開北小学校での災害情報伝言ゲーム

### 宮教大 311 ゼミの WS「～いのちのメガホンをつなげ！～ 災害伝言ゲーム」

石巻市立開北小学校の主催する防災教育チャレンジデーにおいて、私たち宮城教育大学 311 ゼミナール有志は「～いのちのメガホンをつなげ！～ 災害伝言ゲーム」という伝言ゲームを基盤としたワークショップを行った。ゲームの概要は以下の表の通りである。

#### ゲームの概要

対 象	小学校高学年の児童とその保護者
人 数	1 グループ 5 人×3 グループ(計 15 人)
流 れ	① はじめにホワイトボードに書いてある表(※4)をみて、どんな情報が必要なのか考える ② 全員でアナウンス(※1)を聞いて、身を守る行動をとる(頭を守って姿勢を低くする) ③ 身を守る行動をやめて、自分の席に座る ④ 各グループの先頭の人にはヘッドホンをつけ、1 つ目の情報である問題文(※2)を聞く(約 1 分 30 秒) ⑤ 先頭の方は、次の人に聞こえた情報を伝える(制限時間 45 秒) ⑥ 最後の人まで情報が伝言されたら、最後の方はホワイトボードの表を埋める ⑦ 最後の方がホワイトボードを埋めている間に、各グループの先頭の方は 2 つ目の情報である地域住民の声(※3)を聞く ⑧ 1 つ目の情報の伝言と同様に先頭の方は次の人に聞いた情報を伝える ⑨ 最後の人まで情報が伝達されたら、最後の方はホワイトボードの表を埋める
注意点	・情報の重要度によって点数が決まっている ・1 番ポイントが高いチームが優勝 ・情報の中には、未確認のものや信用できないものも含まれているため、間違った情報を伝言しないように気を付ける

ゲームは、一般的な伝言ゲームのルールを基本としつつ、地震による津波災害が発生したことを想定した。また、実際にワークショップを行う開北小学校付近の地名等をアナウンス原稿に盛り込んでゲームを制作した。特に 2 つ目の情報である「地域住民の声」は、次の人に伝言をしても問題がない情報と、不確かであるが故に伝言してしまうと混乱が生じてしまう可能性のある情報とが混在しており、ただの伝言ゲームではなく、災害時というイレギュラーな状況の中でいかに情報を整理し取捨選択することができるかが求められる活動になるよう工夫した。

また総括として、ワークショップの最後には、災害時に情報を集めるためのキーワード『だいふく』について説明した。噂や確認できていない情報に気を付けて安全に避難所を行うこと、そしてそのような情報を発信して混乱を引き起こさないようにすることの大切さを伝えた。

実際に児童と保護者に配布した問題文等の資料は 6 ページ～8 ページで提示する。

## ③成果と課題

活動を行い、まず親子ともに真剣に、かつ楽しそうに活動して下さったことが成果の一つに挙げられる。また、多くのグループでは 1 回目に流された「津波警報」や「避難場所」の情報をきちんとおさえて伝達することができた。これは、地元の地名



や施設名などを入れて問題を作成したことや、児童にはこれまでに津波災害や避難に関する学習の機会があったこと、そして保護者は震災の経験や教訓があったことなどが考えられる。今回の活動は親子参加であり、活動の前後に親子で防災に関するやり取りが見られた。このことより、防災に関する取り組みを提供することは、今後家庭で防災について話すきっかけになり得ると、強く感じた。

その一方で、課題もあった。問題の文量である。活動中に参加者へ話を聞いたところ、「難しかった。」「問題が長かった。」という意見がいくつか挙げられた。参加者が飽きず、楽しく活動できるよう、説明の際の言葉遣いと併せて難易度や問題の量の調整が必要だ。また、事前に学校側と打ち合わせていたものの、ゲームを行うはずの児童が来なかったり、対象としていない学年の児童が来てしまったりする場面があった。誰を対象としているのか、人数はどれくらいなのかなどを予め明確に提示しておく必要があると考える。加えて、参加児童を待っている保護者や様子を見に来た人たちが持て余している様子もみられたため、見学者も楽しめるような工夫をしていきたい。

これらの課題点の改善も意識しながら南あわじユース防災プロジェクトでの活動に向けて修正を行った。



【参考】ゲームの際に使用したアナウンス原稿(※1)、1つ目の情報の問題文(※2)、2つ目の情報の地域住民の声(※3)、ホワイトボードの表(※4)は以下の通りである。

#### ※1 アナウンス

地震発生。地震発生。こちらは防災石巻、石巻市役所です。ただいま地震がありました。落ちついて行動して下さい。まず身の安全を守り、火の元を始末して下さい。外にいる方は落下物やブロック塀などに気をつけて下さい。今後のテレビ、ラジオの情報を聞いて、落ち着いて行動して下さい。

1つ目の情報(※2)と2つ目の情報(※3)

#### 【市役所から流された情報】

こちらは防災石巻、石巻市役所です。ただいま、津波警報が発令されました。ただいま、津波警報が発令されました。予想される津波の高さは1m～3mです。中里(なかざと)、大街道(おおかいどう)、開北(かいほく)地区に対して、避難指示が出されました。いち早く避難してください。避難先は中里小学校、住吉中学校、住吉小学校、開北小学校です。最寄りの避難所へいち早く逃げてください。これらの避難所はあくまでも一次避難所です。身の安全が確保できた方は、より遠くでより高い場所へ避難してください。また、避難ビルへの避難も検討してください。ここで現在入った情報です。ヨークベニマル付近の民家で火災が発生しました。付近の道路を避けて避難するようにお願いいたします。

#### 【街で耳にした情報】

「北上川の水位が上がって堤防を越えそうだから近づくなって町の消防団のおじさんから聞いたよ！」

「今、SNSで見たんだけど、土佐犬5匹が脱走してパニック起きてるみたいだよ」

「セイホクパークのほうで土砂崩れが起きたから、近づかないでくださいって警察から聞いたよ」

「大橋のCOOPの前の道路が地割れを起こして通れないって交番のおっさんがいったよ！」

「開北小の前のセブンで、暴れて食料奪い合ってる人がいるって友達がLINEで教えてくれたよ」

ホワイトボードの表(※4)

【伝えてほしかった情報】

1.市役所から流された情報について ※誤った情報の場合は減点1

○(津波警報)が発令された。津波の高さは(1)～(3)メートル

→津波警報(5点)、津波の高さ(各2点)

○(中里)、(大街道)、(開北)地区に(避難指示)が出された。

→中里・大街道・開北(各1点)、避難指示(5点)

○避難先は(中里小学校)、(住吉中学校)、(住吉小学校)、(開北小学校)

→各1点

○これらの避難所はあくまでも(一次避難所)。安全が確保できたらより(遠く)、より

(高い)場所へ避難する。

→一次避難所(3点)、遠く・高い(各2点)

○(避難ビル)への避難も検討する

→3点

○(ヨークベニマル)付近の(民家)で火災が発生

→ヨークベニマル、民家(各1点)

2. 街で耳にした情報について ※うわさや確認できていない情報は減点3

誰が	どこで	何がおきた(おきそう)と言った
消防団(のおじちゃん) 2点	北上川(2点)	堤防を越えそう 2点
警察 2点	セイホクパーク (2点)	土砂崩れ 2点
交番(のおっさん) 2点	大橋の(1点) COOPの(1点) 前の道路(1点)	地割れ 2点

## 総括で使用した資料

### まとめ

つなみ  
津波がきたら、、、

- ・より遠く、より高いところへ避難する！
- ・避難するときは火災や土砂崩れの情報にも注意する。
- ・信頼できる情報を集める

さいがい じょうほう  
災害が起きたときに情報を集めるためのキーワード『だいふく』

だ:だれが言っているのか

い:いつ言ったのか

ふく:複数の情報を確かめたのか

おぼえておくと  
便利だよ！



じょうほう  
情報には十分気をつけて、安全に

ひなん  
避難できるようにしよう！！



かくにん じょうほう  
うわさや確認できていない情報を話  
したり SNS で伝えたりすると混乱す  
るので注意しよう！



### 3. 南あわじユース防災プロジェクトでの取り組み

#### ①ユース防災プロジェクトについて

阪神淡路大震災で被災した兵庫県南あわじ市では、連携する高等学校・大学の生徒・学生を中心に多世代による防災教育のかたちを模索し、防災企画・運営等をするプロジェクトを行っている。本プロジェクトは、これからの防災や減災の担い手の育成、および防災意識と社会参画意識の向上を目指し、南あわじ市が一丸となって行う取り組みである。今年度は兵庫教育大学、鳴門教育大学、舞子高等学校、淡路三原高等学校、宮城教育大学の計5校の生徒・学生がプロジェクトに参加し、能登ボランティアのポスターセッション、防災リュックの体験、避難所サバイバルゲーム、3Dプリンターで生成された地図から防災を考える取り組み等、生徒・学生が小学生に向けたワークショップを展開した。

#### ②プロジェクトチームでの顔合わせ

本番前日は、自然の家の会議室で、顔合わせを行った。まず南あわじ市教育委員会の浜田さんからアイスブレイクを兼ねて、配布されたレゴを1つ使って自分の感情を表し、みんなで発表しあった。自分と同じパーツを使っていたり、同じパーツでも別の表現だったり初対面の相手を知るうえでいい時間だった。

次に、鳴門教育大学さんのリハーサルもかねて防災すごろくを二チームに分けて行った。クイズ形式のすごろくのため、自分の知識があっているのか再確認できたのと同時に、1つのゲームを楽しむことで、プロジェクト全体の団結力が大きく上がったのを身をもって実感した。



その後、夕食をはさみ東日本大震災当時石巻西高校で教頭を務めていた斎藤幸男先生からお話を伺った。その中で斎藤先生が強く訴え続けたのは、子供の笑顔を守ることだ。震災後、子供たちの顔から笑みが消えた。斎藤先生はそれを何とかしたいと考え、呼吸法に目を付け、実際の医者たちが監修した「ラッタッタ体操」を日本中に広め続けている。

さらに、宮城教育大学として馴染み深い、「p4c」を行い、互いの関わりが強くなった。また、子供の心を開く話の聞き方や、かかわり方を、目の前で実際に、魂のこもった実演で学ぶことができたのは、今後忘れることのない大きな財産になった。



### ③倭文小学校での災害情報伝達ゲーム

当日は倭文小学校をメイン会場として南あわじ市の総合防災訓練が行われており、地元の高校生や警察の方々、消防士や消防団の方々、ボランティア団体の方々など多くの人がブースを企画していた。

防災訓練に参加していた南あわじ市のみなさんは防災意識がとても強く、子供からお年寄りまで防災にしっかり向き合っている様子が見られた。兵庫県明石市出身、元経済産業大臣・西村康稔氏も会場にいらっしゃった。

ユース防災プロジェクトとしては、前日の顔合わせの際に齋藤先生から紹介された「ラッタッタ体操」を、倭文小学校の児童と共に行った。



総合防災訓練が終了した後、メイン会場となっていた倭文小学校の5・6年生とその保護者を対象として開北小学校同様「～いのちのメガホンをつなげ！～ 災害伝言ゲーム」という伝言ゲームを基盤としたワークショップを行った。

ゲームの概要は以下の表の通りである。

#### ゲームの概要

対 象	小学校高学年の児童とその保護者
人 数	1グループ5人×3グループ(計15人)

流 れ	①はじめにホワイトボードに書いてある表(※8)をみて、どんな情報が必要なのか考える ② 全員でアナウンス(※5)を聞いて、身を守る行動をとる(頭を守って姿勢を低くする) ③ 身を守る行動をやめて、自分の席に座る ④ 各グループの先頭の人(※6)はヘッドホン(※7)を付け、1つ目の情報である問題文(※6)を聞く(約1分30秒) ⑤ 先頭の人(※6)は、次の人に聞こえた情報を伝える(制限時間45秒) ⑥ 最後の人まで情報が伝言されたら、最後の人(※6)はホワイトボードの表を埋める ⑦ 最後の人(※6)がホワイトボードを埋めている間に、各グループの1～4人目の人は地域住民の声を聞き、どの情報を5人目の人に伝えるか話し合う(※7) ⑧ 4人目の人は5人目の人に話し合って決めた情報を伝える ⑨ 最後の人まで情報が伝達されたら、最後の人(※6)はホワイトボードの表を埋める
注意点	・情報の重要度によって点数が決まっている ・1番ポイントが高いチームが優勝 ・情報の中には、未確認のものや信用できないものも含まれているため、間違った情報を伝言しないように気を付ける

開北小学校でのゲームをベースにしつつ、架空の町「さくら町」へ観光に来たことを想定してゲームを行った。

基本的な流れは同じだが、事前にゼミ生を対象として行ったリハーサルの中で、伝言をする中で、情報の取捨選択がチーム内の前半のメンバーで行われた場合、伝わる情報が少ないという意見から、2次情報は1～4人目のメンバーで話し合い、5人目のメンバーに伝える情報を整理するという流れにした。

ワークショップの最後は、総括として開北小学校と同様のまとめの資料を用いながら災害時に情報を集めるためのキーワード『だいふく』について説明した。噂や確認できていない情報に気を付けて安全に避難所を行うこと、そしてそのような情報を発信して混乱を引き起こさないようにすることの大切さを伝えた。

児童と保護者に配布した問題文等の資料は13ページ～14ページで提示する。



## ④ 成果と課題

成果としては、防災情報伝言ゲームで、子どもたちに防災に対して向き合う機会を提供できたことが挙げられる。

純粋にゲームを楽しんでもらい、またゲームを通して、情報を伝えること・取捨選択することの重要性を理解してもらうことができた。以前、開北小学校でゲームを行った際は、ルール説明をゲーム中に表示せずに子どもたちや保護者・先生方の混乱を招くきっかけとなってしまった。それらを改善したこともあり、斎藤先生をはじめとする教育関係者の方々より、伝言ゲームに対する好評をいただくことができた。





また、南あわじ市総合防災訓練に参加したことで、さまざまな団体の防災事業を学び、体験し、災害食を食べることができ、肌で感じながら学ぶことができた。他大学、他団体と「防災」という共通のテーマで交流することができた。

一方で、防災情報伝言ゲームの難易度が高く、途中で解答を考えることを諦める児童が見られ、予定よりも問題の音声を読み流す回数が多くなった。さらに、実在しない町の設定が児童に対して伝わりづらかった。町のマップをこちらの想定以上に注視していたため、もっと凝った内容にすべきだった。

最後に、一回目に伝言ゲームを体験する児童と二回目に体験する児童が同時に集まってしまった。半分の児童を教室の後ろで待機させていたが、見学には長すぎる時間であったため、また違った取り組みを提供したい。



【参考】ゲームの際に使用したアナウンス原稿(※5)、1つ目の情報の問題文(※6)、2つ目の情報の地域住民の声(※7)、ホワイトボードの表と2つ目の情報を話し合う際の資料(※8)は以下の通りである。

※5 アナウンス

地震発生。地震発生。

こちらは防災さくら、さくら町役場です。ただいま地震がありました。落ちついて行動して下さい。まず身の安全を守り、火の元を始末して下さい。外にいる方は落下物やブロック塀などに気をつけて下さい。今後のテレビ、ラジオの情報を聞いて、落ち着いて行動して下さい。

1つ目の情報(※6)と2つ目の情報(※7)

【1人目に流す問題文】

こちらは防災さくら、さくら町役場です。ただいま、津波警報(10)が発令されました。ただいま、津波警報が発令されました。予想される津波の高さは1m～3m(各5)です。さくら町(5)に対して、避難指示(10)が出されました。いち早く避難してください。避難先はさくら神社・さくら小学校・さくらスタジアム(各5)です。最寄りの避難所へいち早く逃げてください。これらの避難所はあくまでも一次避難所(5)です。身の安全が確保できた方は、より遠くでより高い場所へ避難(各5)してください。また、避難ビル(5)への避難も検討してください。

～ここからは地域住民の声です～(×は－10)

×：「さくら橋を通った方が近道だから、みんな通っているみたい。一緒に行こうよ！」

×：「今SNSで見たんだけど、津波の到達時間は40分後みたいだよ。家に戻っても大丈夫そうだね。」

→SNSの根拠のない情報をすぐに鵜呑みにしない！

○：「警察(5)から、北東の山(5)で土砂崩れが起きたから近づかないでくださいって聞いたよ」(完答で+5点)

×：「さくらスーパーマーケットは、川が近いけど海から50km離れてるから安全だよ。みんな逃げ込んでるらしいから一緒に行こうよ」

→東日本大震災では、津波が川をのぼっていき、海岸から49km離れた場所まで到達しました。

○：「消防団のおじさん(5)が、町役場の前の道(5)で地割れが起こって通れないって言うってたよ」(完答で+5点)



ホワイトボードの表と2つ目の情報を話し合う際の資料(※8)

### 【ホワイトボードへの記入事項】

- ① ( ) が発令された。
- ② 予想される津波の高さは ( ) m～ ( ) m
- ③ ( ) に対しては ( ) が発令された。

地区名

- ④ 避難先は ( )、( )、( )
- ⑤ ④の避難先はあくまでも ( ) 次避難所
- ⑥ より ( )、より ( ) 場所へ避難する
- ⑦ ( ) へ避難することも考えてほしい

場所

～いのちのメガホンをつなげ！～災害伝言ゲーム

地域の人の声 (5人目の人に伝える情報)

だれが	どこで	何があった

地域の人の声 (5人目の人に伝えない情報)

だれが	どこで	何があった

## 4. 総括

2回の活動とも、「災害時における情報の重要性を、児童に伝える」という大きな目的を果たすことができた。

ありふれた情報の中から、その場で必要な情報を取捨選択する必要があること。そして、情報伝達がスムーズに行かない場合、結果として他者に正しい情報や災害時に必要な情報を伝えられないということを、ゲームを通して子どもたちに体感してもらうことができた。

学校現場でも、総合的な学習の時間やプログラミング教育の一環として「情報リテラシー」を学ぶ機会がある。教科書や副読本だけで情報リテラシーを学ぶのではなく、災害も絡めた「災害情報伝言ゲーム」という取り組みを行うことによって、児童が実際に体験して情報リテラシーを学ぶことができる、ということ提唱したい。

また、実際のゲーム活動を通して、問題文中に架空の設定ではなく身近な地域名が入っている方が自分事として捉えやすく、かつ難易度も調整できるということが分かった。記憶があるうちに大震災を経験していない子どもたちが、「大地震」や「津波」に関する理解があるかどうか、という点も考慮しながら問題文を作成していく必要がある。

加えて、教員を志す者として、ゲームの難易度やルールを対象学年に合わせることの大切さを学んだ。学校の授業を展開する際にも、目の前にいる子どもたちの特徴や様子から、彼らに似合った教材を提供したい。

情報社会の現代において、災害と共に生きていくためには、正確な情報を「得る」こと、そして「伝える」ことが必要となる。今回我々が企画した活動は、それらに不可欠な力を育成するきっかけの一つになるはずだ。

自分から他者へ、正しい情報を正確に伝えることの難しさ、また、情報の取捨選択の大切さを、企画者である我々も改めて考えることができた、有意義な活動であった。防災を子どもたちに「伝える」ことが主な活動であったが、他大学や他団体との交流、そして防災活動に携わる関係者の方々と意見を交わしたことによって、私たち自身も震災・防災に対する考えを深めることができた。

## 5. メンバーの振り返り

### 佐々木侑里(M2 年)

防災に関する話を聞いたり、アクティビティに参加したりすることは何度もありましたが、自分たちで防災・災害に関するゲームを制作して活動するのは初めてで、とても有意義な時間になりました。一言で「防災・災害に関するゲーム」と言っても設定する場面や想定する災害は様々で、数多くの選択肢がある中でゼロから意見を出し合い作っていくのは難しかったです。ですが、メンバーと協力しながら更にはゼミ生にも何度もリハーサルで協力してもらい2回のワークショップを無事に終えることができました。来年からは教員として働く予定なので、今回の災害伝言ゲームを現場でも活用できたらいいなと思っています。

### 関町咲穂(2 年)

今回の活動は、開北小学校の主催する「防災教育チャレンジデー」、そして倭文小学校で開催される「ユース防災プロジェクト」の2回にわたって行われた。2回にわたる活動の中で、正しい情報を選択し伝えることは、自分たちが想定していたよりもずっと難しいことがわかった。そのため災害が起きた際などの混乱時に、正しい情報を信じて安全に避難できるようになること、また人を混乱させるような情報をむやみに発信しないようにすることの大切さを伝えていく必要があると感じた。そして「ユース防災プロジェクト」では他大学との交流を通し、防災に関する取り組みや意識を共有する時間が設けられていたため、同じく教員を目指す立場として防災について考える貴重な経験となった。このような交流を通じて得ることができた新たな視点や知見、活動で得た反省点を踏まえ、今後も熱心に活動していきたいと感じる。

### 増井美羽(2 年)

教員を志す者として、他者と共に防災について話し合ったり、私たちができる防災を伝えたりする活動ができたことは貴重な経験だった。伝言ゲームの作成にあたっては、問題文の修正や得点配分等、対象とする小学生に相応しい問題作りに注力したものの、実際に伝言ゲームを実施した後は課題点が挙がり、改善の余地が見られた。武田先生のご指導もいただきながら私たちが一から作ったゲームであるため、修正しつつ他の機会でもまた伝言ゲームが実施できればと思う。今回私は石巻と南あわじを訪問したが、どちらの児童・保護者も、このような防災の企画に対して積極的に活動してくださる姿勢が見られた。小学生が家に帰って保護者の方々にチャレンジデーや防災プロジェクトについて話す等、伝言ゲームをはじめとする企画がひとつでも多くの家庭で防災を再考するきっかけになれば嬉しい。また、災害に遭った際は「best」ではなく「better」の選択が求められる。そのためには最善の答えを教えるのではなく、自分の力で考えることのできる機会を提供したり、他者と話し合い共有する機会が防災教育には欠かせないことを学んだ。日本にいれば、どの地域にしようと地震や津波といったリスクがある。本体験を通し、自分の身を自分で守る姿勢、ありふれた情報の中から正確な情報を取捨選択できる力、災害に対して少しでも関心を寄せることができる者の育成と防災教育を追求したい。最後にこの場をお借りして、開北小学校 防災教育チャレンジデー、南あわじ防災プロジェクトでお世話になった方々に御礼申し上げます。

### 千葉雄翔(1 年)

開北・南あわじのプロジェクトを通して多くの経験ができ、自分の中での防災に対する姿勢がより強くなった。まず、防災に関するゲームを作ることが初めて

で、果たしてうまくいくのだろうかと不安な気持ちだったが、チームのメンバーとの協力があってこそその成功を収めることができてとても嬉しかった。特に心に残っていることは南あわじ市の子どもたちの笑顔である。ゲームに参加してくれた子どもたちの楽しそうな笑顔には今までの頑張りを認められた気がしたり、ラッタッタ体操を踊る子どもたちの生き生きとした笑顔には勇気を貰えたりした。防災教育を学ぶという目的で入った 311 ゼミナールだが、防災以外にも多くのことを学べる有意義なゼミナールだと再認識することができた。このプロジェクトの中でも多くの出会いがあり、多くの発見があり、将来を見ずえるきっかけも手に入れることができた。この経験を糧にこれからも学び、自分にとっても誰かにとっても良い影響を与えていきたい。

## 根本蒼唯(1 年)

今回、今までの防災イベントと大きく異なった点は、自分たちが防災を教える側となっている点だ。だからこそこれまでの経験が大きく試された。これまで武田先生から直接教わったり、機会を提供いただいて学んだことや、自分で探求したことを存分に詰め込んで、今回のイベントに挑んだ。まず鳴門教育大学の方をはじめとした、多くの防災に対して真剣に取り組む同じ志の学生が集まり交流できたことは大きな財産になった。また、倭文小の児童とも、斎藤先生から教わった「わはは体操」を通して交流できたことも、とても楽しかったし大きな達成感と感動を得られた。また今まで自分は学校や家など、自分が慣れている場所でしたしか防災訓練をしてこなかったので、慣れてない場所で防災訓練をすることは新鮮で、いつも以上に緊迫感があった。伝言ゲーム本番でも、様々な課題は見られたが、最後は笑顔で帰っていく姿を見て、やりがいを感じたとともに、この笑顔を絶やさないためにも、今回学んだことをしっかりととどめていて欲しいと強く感じた。淡路島が大好きになった。

## 福岡加彩(1 年)

防災を教える側として実際に企画・制作を行いイベントに参加することは初めてだったためとても有意義な経験となった。これまでの自分の経験からいかに企画に落とし込んで実践へと繋げていくかが難しいと感じることが多々あったが、たくさんのアプローチの仕方を武田先生や先輩方から学び、企画を形にできたと感じる。宮城県内である石巻市開北小学校だけでなく、南あわじ市にまで行動範囲が広がり、防災に対する意識の差を実際に体感し、同じことをするにしても違ったアプローチで行うことや、より丁寧に行うことの必要性を学ぶことができた。開北小学校、倭文小学校の二校でのワークショップを通じて、たくさんの人の防災に対する思いを近くで感じることができ、教員になった際の防災教育の必要性の高さをさらに感じ取ることができた。人と人とのつながりから実現し参加することのできたこの二つのプロジェクトを通して新たなつながりが増え、自分自身の活動の幅が広がったのを感じた。この経験から、自分自身も防災に対する意識の変化を感じ、今後も様々な活動に意欲的に取り組んで行きたいと思う。

以 上